

## 一般部門 佳作

杉谷 孝博

私が水上勉作品と出会ったのは約二十六年前の二十歳前後の頃、三國廉太郎演じる『飢餓海峡』の映画であった。古い白黒映画ではあったが、そのストーリー性と人間臭さ、いわゆる「みずかみズム」に嵌ってしまい、水上勉映画作品を片っ端から観る様になった。しかしながら、これは一度原作を読まねば真骨頂は味わえないと思い、古本屋を訪ねては「水上作品」を買い集めるようになった。

そんな中で一番最初に出会った『飢餓海峡』はインパクトある作品なので、この本の読後感想文を生誕百年祭の課題に選びたいと思う。

この本はもう何度読み返したか分からない。それ程複雑に入り組んだ人間模様が面白かった。一見、推理サスペンスのような物語であり、トリックも盛り込まれているが、真の面白さはそこではない。主人公は元より、様々な登場人物が貧困から脱出したいと願う、やむにやまれぬ諸事情を人間臭さで個々に表現された人間関係が胸を打つ。最終章辺りになると、悪である筈の殺人犯をどうにかして減刑にしてやれないだろうかという人情まで誘い出すテクニクが凄い。この作品名の如く、戦後の飢餓時代の「荒波Ⅱ海峡」をどんな手を使ってでも超えていきたいという、正に人間剥き出しの本質を『飢餓海峡』という小説を通して表現しているのではと感じずにはいられない。

『飢餓海峡』ファンとして、映画、小説とくれば次は実際の足取りを追いたくなるものである。そこで一番に紹介したいのは、津軽海峡。死という表現で最初と最後を飾る海を見たかったのである。私は津軽海峡を越える船に乗り、夏の夕暮れ時に海峡を覗き込んだ。まだ日が残る茜空であったが、光の差し込まないドス黒い色で深い闇へと誘う顔をしているかのような暗い紺碧の海であった。思いを馳せているからそう見えただけかもしれないが、物語がフィクションであっても実話としてあり得る光景だと思えるほど静かで怖い場所だと感じた。

次に紹介したいのは、娼婦であった八重の死体が流れ着く舞鶴市三浜のアンジャ

島付近である。ここは京都府と福井県の県境にあり、東舞鶴市内からでも山一つ越えた交通の不便な場所で、現在は過疎化の進む小さな漁村である。物語の中に出てくる小学校は現在廃校である。しかしながら、山河や島々の景色は変わる筈もなく、アンジャ島は今でもゆったりと三浜の沖に横たわっている。冬になると日本海の大きな波を背に受けて自然防波堤として活躍するそうだ。そのような島付近に潮流に乗って死体が流れ着いたという設定になっている。

湾は複雑に小岩などがせり上がり、奥に大きなアンジャ島が座っていて、物語が目に見えかんでくるようだ。全景を一望しようと小高い丘に登って見ると、アンジャ島は想像より遥かに大きな島であった。周囲が約〇・八kmあるそうだ。水上先生と同じ場所と同じ空気を味わえたことに感動した。

私が今回津軽海峡や三浜漁村を訪れて一番感じたことは、例え一部の舞台であっても、限なくその地を見て、調べ、題材に取り入れるという水上先生の小説に対する情熱と探求心。各々の地で感じた風景を偽りなく小説に反映しているからこそ、よりリアルに、より立体的に感じる事ができ、そんな素朴な技法こそがこの作品の魅力を引き立てているのではないかと思った。「罪を犯しても仕方ないじゃないか」という本質を描くための強烈なスパイスを見つけた気がしてならないのは私だけだろうか。